

さくらだ  
桜田遺跡

所在地 豊田市蕪木町地内  
(北緯 35 度 1 分 14 秒  
東経 137 度 17 分 14 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発  
施設用地造成

調査期間 平成 23 年 12 月

調査面積 400 m<sup>2</sup>

担当者 鵜飼雅弘・本田英貴・石井香代子



調査地点 (1/2.5 万「東大沼」)

調査の経過 桜田遺跡は県教育委員会の詳細分布調査により、遺物散布として登録された遺跡である。豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成に伴う範囲確認調査として、愛知県企業庁より委託を受け実施した。

立地と環境 本遺跡は県道 477 号線の南に位置し、水田部とその周辺の丘陵緩斜面に立地する。東側に接して道山遺跡が所在する。

平成 19・20 年度の分布調査で山茶碗と縄文土器が採集されており、平成 22 年度には試掘調査を行い水田周辺の丘陵緩斜面で土坑と近世陶器を確認し、水田部で内耳鍋や土師器が出土した。水田部東側の尾根上では剥片を確認している。

調査の概要 試掘坑は水田部に 25 ヲ所 (TT01～25)、水田周辺の丘陵部に 13 ヲ所 (TT26～31、33～42) の計 38 ヲ所に設定し、遺構・遺物の有無と、堆積状況の確認を行った。また、道山遺跡として調査した水田部北東の丘陵部に設定した 12 ヲ所 (道山 TT13～24) については本来本遺跡の範囲である。

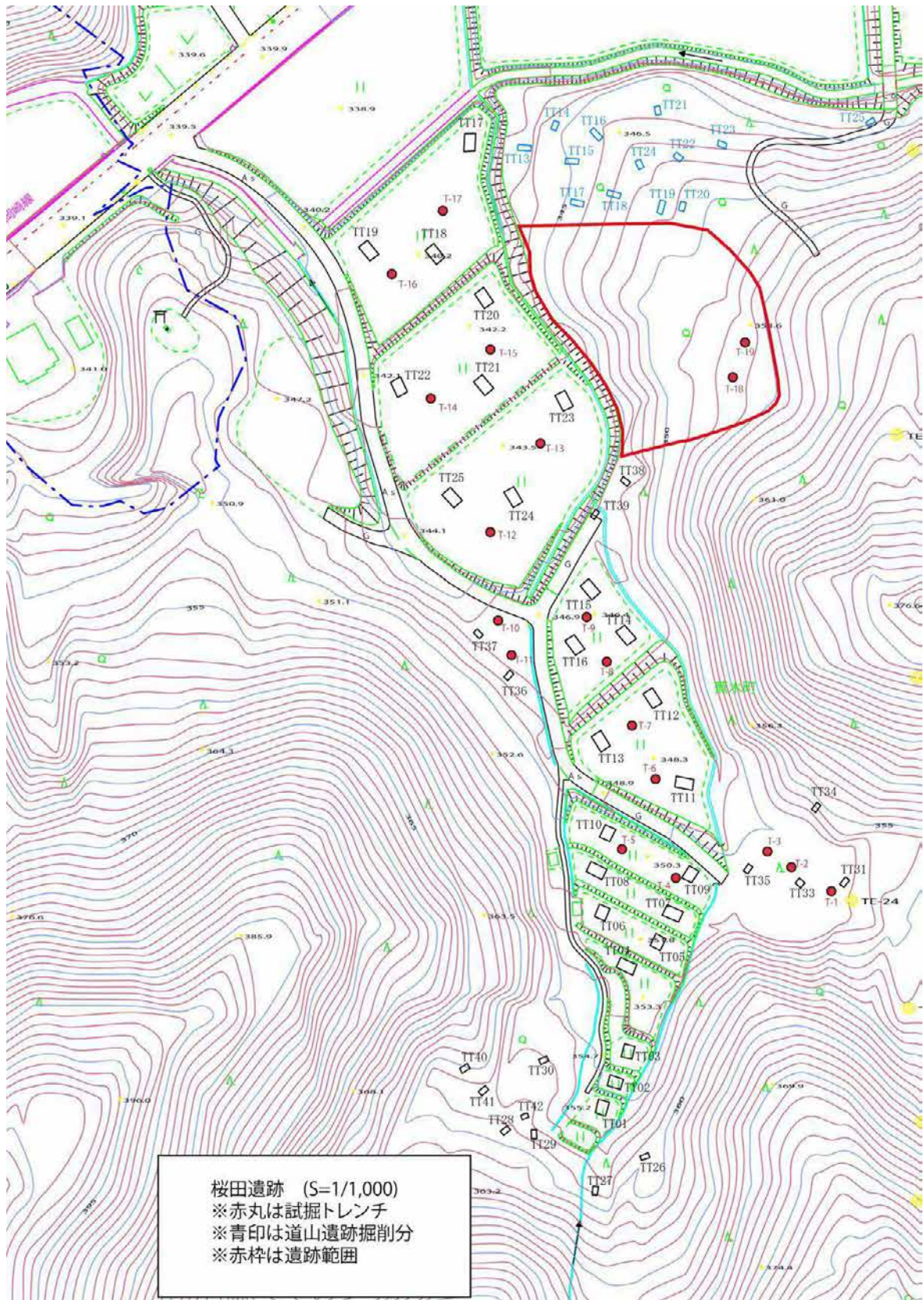
水田部では青灰色の砂層を地山としてその直上に礫層が展開する。礫層直上のシルト層からビニール袋が出土するなど、圃場整備に伴う改変が見られ、遺物は耕作土中から出土するのみであった。

水田南側の緩斜面および谷部では TT28 で時期不明の土坑を検出したが、腐葉土直下からである。遺物は TT25、26 で中世から近世の遺物が若干量混在して出土した。

水田部東から南東に伸びる谷は湿地状であり、湧水も激しい。TT35 で土坑状の落ち込みを確認したが、時期不明である。

水田部南西側の田には棚田状の地形であり、近世以降に耕作地を拡張するための改変跡が見られた。

水田北東の丘陵部では、道山 TT13、15、18～19、21 で表土から山茶碗や近世陶器が出土している。(本田英貴)



どうやま  
道山遺跡

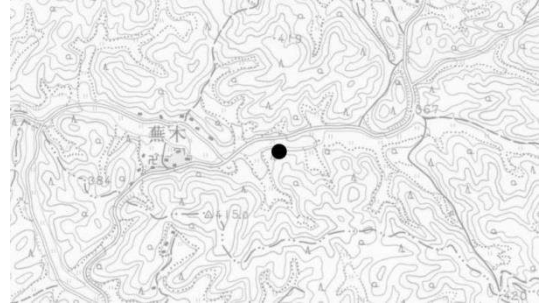
所在地 豊田市蕪木町地内  
(北緯 35 度 1 分 18 秒  
東経 137 度 17 分 28 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発  
施設用地造成事業

調査期間 平成 23 年 12 月～平成 24 年 1 月

調査面積 300 m<sup>2</sup>

担当者 鵜飼雅弘・本田英貴・石井香代子



調査地点 (1/2.5 万「東大沼」)

調査の経過 道山遺跡は遺物散布地として登録された遺跡である。豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成に伴う範囲確認調査として、愛知県企業庁より委託を受け実施した。

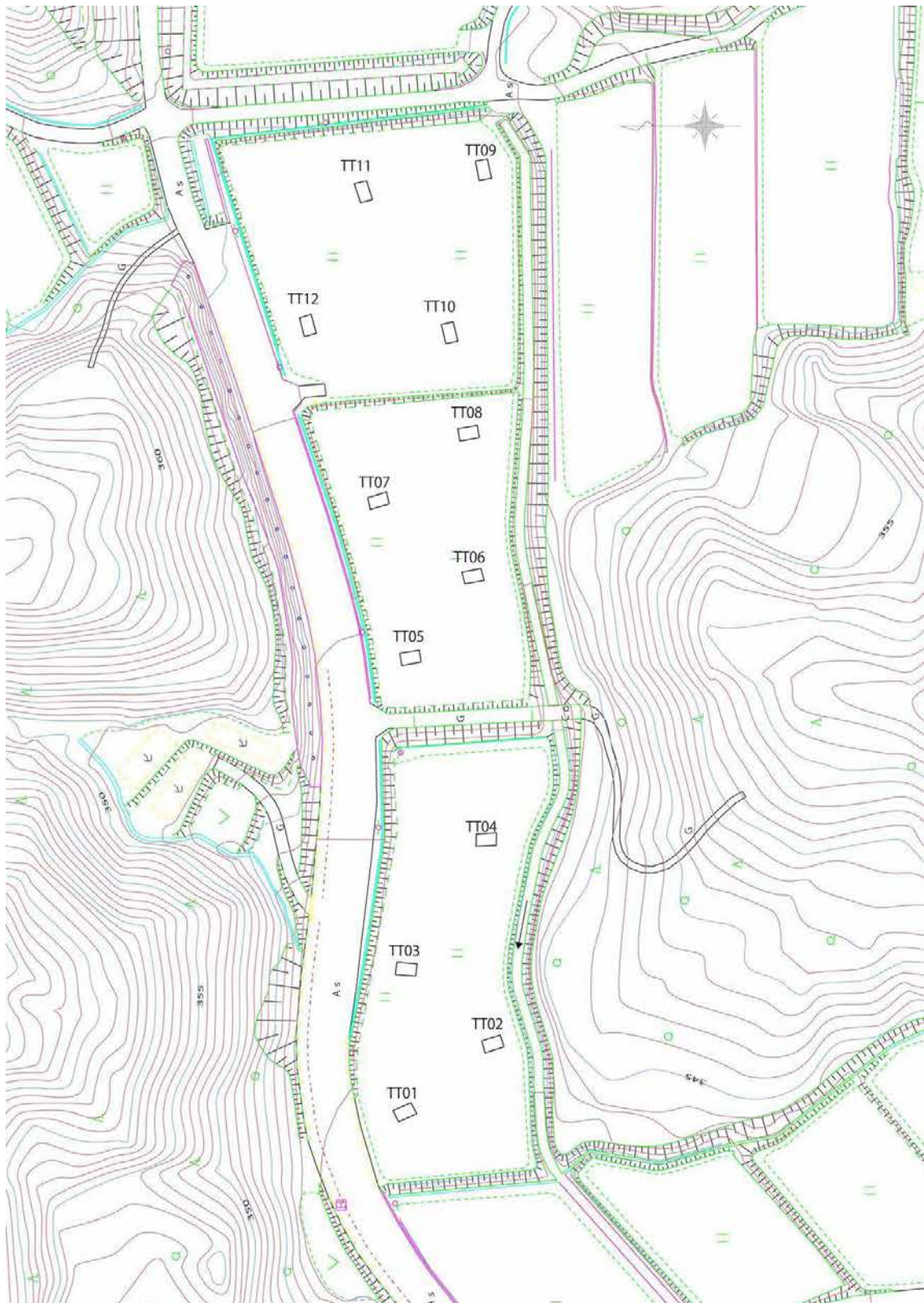
立地と環境 遺跡は郡界川支流の蕪木川右岸に位置する。南には隣接して下道山遺跡、桜田遺跡がある。下山村誌によればかつて、地区内で中世の陶器が採集されており、遺跡地区には周知の遺跡として登録されている。そのため、試掘調査は実施されていなかった。

調査の概要 蕪木川沿いの水田に 12 箇所の試掘坑を設定して調査を実施した。

試掘坑の多くは圃場整備の影響か地山近くまで現代の土管等を含む整地土や攪乱が入っていた。基本層序は表土、整地土の下で粗砂や砂礫層からなる地山になるか、整地土と地山の間には有機物層が残る試掘坑もあった。これらの試掘坑では遺構を確認することはできなかった。

遺物は山茶碗など中世の遺物や、多くの近世以降の陶磁器片が整地土から出土している。周辺から流れ込んだものか、客土に含まれていたものの可能性が高い。

調査では有機物層や粗砂、砂礫層といった、かつて湿地や、流路だったことをうかがわせる土層の堆積が見られ、遺構や遺物から生活痕跡を確認することもできなかった。今回の調査地では後世の土地改変により遺跡が滅失したか、もともと遺跡ではなかった場所と考えられる。 (石井香代子)



道山遺跡トレンチ位置および遺跡範囲 (1/2000)

くりはざま  
栗狭間遺跡

所在地 豊田市下山田代町地内  
(北緯 35 度 1 分 2 5 秒  
東経 137 度 19 分 32 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発  
施設用地造成

調査期間 平成 24 年 1 月

調査面積 350 m<sup>2</sup>

担当者 鵜飼雅弘・本田英貴・石井香代子

調査の経過 栗狭間遺跡は県教育委員会の詳細分布調査により、遺物散布地として登録された遺跡である。豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成に伴う範囲確認調査として、愛知県企業庁より委託を受け実施した。

立地と環境 栗狭間遺跡は豊田市東北部の下山田代町に所在する。本遺跡は丘陵緩斜面と丘陵地に囲まれた平坦地と谷状の地形からなる。南側に湿地帯、北側開放部が水田、その他は山林となっており、水田部東側丘陵を挟み、鶴ヶ池遺跡が所在する。平成 19・20 年度の分布調査で山茶碗・土器が採集され、平成 23 年度の試掘調査で溝が検出され、弥生土器・土師器甕が出土している。

調査の概要 試掘坑は TT01～TT49 の 49 地点を設定し、遺構・遺物の有無と堆積状況を確認した。

湿地帯南の緩斜面 (TT01～07、49) では腐葉土の下に 20 cm の厚さを測る黒・暗褐色層を TT01、05 で確認し、いずれも土師質の土器が出土した。TT04、05 ではこの包含層の下からの土坑を確認している。

遺跡中央の平坦地とその周辺では TT08～18、20～23、32～34、36～37 の範囲に褐～黒色のシルト層が広がる。湿地帯に張り出した範囲 (TT11～14) では TT11 で黒褐色シルト層の下から土師器、灰釉陶器を伴う土坑を検出し、TT14 でも地山直上からの土坑を確認している。

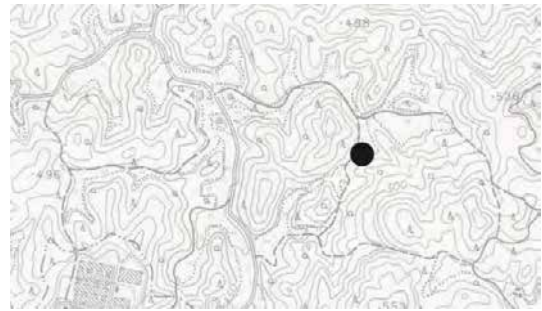
中央の平坦地 (TT20～21) では腐葉土直下と地山直上に黒色シルト層を確認し、TT21 では黒色層に挟まれた黄褐色シルト層でピットを検出し、それぞれの黒色層から土師質鍋、縄文前期の土器片が出土している。

西側谷部に設定した TT23 では土坑を検出し、TT33、34 から上下の黒色層から山茶碗が出土した。

遺跡北西部の斜面 (TT35、43～44、47) では表土直下に黒褐色シルト層が広がり、遺構は確認できなかったものの、TT35、44 でその層から灰釉陶器が出土した。

遺跡北東部の緩斜面 (TT40～42) では、TT40、42 で地山直上に厚さ 15 cm をはかる黒色層が確認でき、TT40 では縄文晩期の土器片が出土している。

(本田英貴)



調査地点 (1/2.5 万「東大沼」)

